

ヒラタケ属のきのこ

根田 仁

私がこれまでつきあってきたきのこの中で、ヒラタケ属は最も身近な存在であった。そして、私の学位論文のテーマであり、一種ごとに深い思い入れがある。また、かつてヒラタケ属だったツキヨタケはスーパースターであり、これ以上面白いきのこはないのではないか？ そういう私が20年前にDNA解析による系統分類手法をヒラタケ属に取り入れてみた。結果として海外の研究者に先を越されてしまったため、出鼻をくじかれてしまったという苦い思い出もある。昨年3月に森林総合研究所を定年退職し、現在は研究の現場からは離れてしまったが、きのこのことは、常に頭の中にある。

そういえば、私が最初に栽培したのはヒラタケであった。高校生の頃、きのこに興味を持った。公園や雑木林の野生のきのこを探すのは楽しいことであったが、自分の手で培養して子実体が形成されるところを観察してみたい。当時は、自ら菌株を分離するノウハウも道具もなかったので、種菌は購入した。鋸屑に米糠を混ぜ、適当に水分を調整し、牛乳瓶に詰め、蒸し器で滅菌し、菌を接種したところ、運良く雑菌に汚染されることもなく、子実体を出すことができた。その後、いろいろなきのこの栽培試験をしたが、この時のことが最も記憶に残っている。

日本産のヒラタケ属は、以下の7種1亜種が知られている。

1. ヒラタケ
Pleurotus ostreatus (Jacq. :Fr.) P. Kumm.
2. ウスヒラタケ
P. pulmonarius (Fr.) Quél.
3. タモギタケ
P. cornucopiae var. *citrinopileatus* (Singer) Ohira
4. トキイロヒラタケ
P. djamor (Rumph. :Fr.) Boedijn
5. ツバヒラタケ
P. dryinus (Pers.) P. Kumm.
- 6-1. オオヒラタケ
P. cystidiosus O.K. Miller subsp. *cystidiosus* O.K. Miller
- 6-2. クロアワビタケ
P. cystidiosus O.K. Miller subsp. *abalonus* Han, Chen & Cheng
7. シロコカワキタケ
P. tuber-regium (Lev.) Singer

日本に分布しないが、よく知られている種として、エリンギ *Pleurotus eryngii* (DC) Quél. がある。この種は中国からヨーロッパの草原に発生するきのこで、セリ科の植物の根から発生するが、おが粉による栽培も可能であり、現在日本で広く栽培されている。

ヒラタケ属の特徴としては、柄は短く、傘に対して偏心性または側方につく、ヒダは柄に垂生、胞子紋は白、担子胞子は円筒形～長卵形、白色腐朽菌、・・・があげられるが、あてはまらない種もある。

ヒラタケ

Pleurotus ostreatus は、ヒラタケ属 (*Pleurotus*) の基準種である。北半球の温帯に分布する普通種だが、形態が変異しやすく、正しく同定されないことも少なくない。他のヒラタケ属の近縁種と混同されることも少なくない。そして、日本では約40年前までウスヒラタケ (*P. pulmonarius*) との区別があまりなかった。

今関(1952)は、ヒラタケの近縁種カンタケ (*P. spodoleucus*) を報告した¹⁾。永井(1953)によると、両者は交配せず、カンタケは2極性と記している²⁾。しかし、その記載を読むと、どうも今関がヒラタケとしていた種は、現在のウスヒラタケを含んでいるようだ。そして、カンタケは、ヒラタケを指している。20数系統の単孢子菌株の交配試験により、カンタケを2極性だと判断したが、この点は却に落ちない。ヒラタケもウスヒラタケも4極性であるため、何らかの原因があったのだろうか。



ヒラタケ 2016年11月14日茨城県つくば市
コナラ枯幹に発生。

ヒラタケは、カンタケとも呼ばれたように、やや寒い時期のきのこである。関東地方では、霜が降りるようになってから野外で見かける。これは、子実体原基形成の条件として低温刺激が必要なため。暖かい時期に生えるヒラタケ類似のきのこは、ヒラタケでないと思った方がよい。9~10月ならウスヒラタケ、6~8月ならトキイロヒラタケ(白色型)が多い。この2種は、ヒラタケよりも小さいことも見分けるポイントである。また、オオヒラタケ、タモギタケ(白色型)などもヒラタケとよく似

ているが、こちらも寒い時期には発生しない。

ヒラタケは、かつて「〇〇しめじ」の名前で盛んに栽培されていた。子実体の成長初期は傘が黒く、株状に発生するため、ホンシメジに似ていないこともない。1989年には全国で3万6千トンの生産量があり、一般的な食用きのことして知られる存在だった。しかし、ヒラタケの生産者は、より市場性の高いブナシメジなどに転換するなどで、生産量は激減した(2017年は3万8千トン)。近年は、傘を大きく成長させて本来の和名である「ヒラタケ」の商品名で販売するようにもなった。



成長し始めたヒラタケ子実体

私が昨年まで懇意にしていた、つくば市のYさんは、昔ながらの「しめじ状」のヒラタケを栽培している生産者である。現場が森林総合研究所に近いこともあり、来客の見学や、試験材料の提供等でも、とてもお世話になった。40年前は、お父様と一緒に、自宅横の倉庫に空調設備を入れたような施設で栽培していたことが懐かしい。現在は、息子さんと近所のパートさん達と一緒に大規模な施設で仕事されている。

引用文献

- 1) 今関六也・土岐晴一(1952) 寒中の新食用菌カンタケについて. 林業試験場報告 53: 69-77.
- 2) 永井行夫・温水竹則(1953) 林業試験場報告 57:1-6.

— 次号へつづく